

第59回瀬戸市文芸発表会

特選作品

俳句

【中村 雅樹 先生選】

夏草や人の入りゆく登り窯

瀬戸市八幡台

加藤 朋代

穴窯に鉛筆ほどの蛇這へり

瀬戸市共栄通

沢田 充子

短夜のカーテン厚き異国かな

名古屋市西区

森 里桜

【高橋 克郎 先生選】

漆喰の屋根締め直す立夏かな

瀬戸市五位塚町

古川 祐次

小鳥来る民次旧居の募金箱

瀬戸市田端町

水野 時子

背なの児が足でよろこぶ遠花火

瀬戸市本郷町

矢野 さよ子

俳句

【水谷 洋子 先生選】

窯出しの壺ちりちりと新樹光

瀬戸市曾野町 磯村 美代子

大空をにじのリボンがむすんでる

名古屋市平針北小²年 岡部 純怜

いわし雲風聴いてゐる口ダンの像

愛知県尾張旭市 田井 春泉

【小田 実希次 先生選】

塩舐めて男炎暑の窯火守る

瀬戸市城屋敷町 武田 稜子

繪手紙の誕生祝ひ風薫る

名古屋市北区 小出 美智子

伸び切って干蛸乾く島小春

瀬戸市みずの坂 加藤 ノブ子

川柳

【松代 天鬼 先生選】

節くれた掌が守り抜く陶の艶
貫けばだんだん重くなる正義
折れそうな心を救うまめな筆

愛知県犬山市 山田 たみゑ

瀬戸市はぎの台 安藤 善通

愛知県尾張旭市 岡田 ゆき

【浅野 滋子 先生選】

窯変に賭けて陶匠火を落す
作陶や見え隠れする魯山人
飛ぶことを疾うに忘れた籠の鳥

瀬戸市品野町 掛樋 嗣征

瀬戸市上水野町 加藤 錦

愛知県尾張旭市 河合 守

短歌

【伊吹 純 先生選】

麻酔より覚めたる刻を六十年の歲月刻む夫と瞳が合ふ

瀬戸市西寺山町

青山 美佐子

ふうわりと釉薬垂れし志野茶碗受くれば人の温もり傳う

瀬戸市ききょう台

加藤 美佐枝

つつがなく今日は五千六百歩シルバーカーを伴侶に歩く

愛知県春日井市

菅原 すみ子

短歌

〔大塚 寅彦 先生選〕

轆轤座に生陶を操る陶工は匠の技の壺立ち上げる

瀬戸市八幡台 梶山 妙子

ふうわりと釉薬垂れし志野茶碗受くれば人の温もり傳う

瀬戸市ききょう台 加藤 美佐枝

霏々と降る雪紅に染め上げて穴窯の火の夜もすがら燃ゆ

瀬戸市品野町 柴田 昭彦

詩

【若山 紀子 先生選】

冬木立ち

中島 登喜子

雑木林の外れの
凸凹だった砂利道が
わずか数日で舗装に変わり
追憶へと誘なう
踏み締めた時の
あの

懐かしい靴音は消えてしまったけれど
道沿いの木立ちは
まるで 何事も無かったかのように
互いに枝を広げ
この冬の青空の中へ
しっかりと伸びている
そして すっかり滑らかになった路上に
その裸身の影をつくる
時々吹き寄せる風に
掌のような梢が
路面を当てどなく彷徨う

影は濃淡を繰り返しながら
時に私の影と重なる
ふと

・・・キカンシ・・・？
・・・木幹枝・・・
・・・気管支・・・
独り言を呟いていた

いつか見た病院の画図と
いま眼の前の木立ちの影とが
脳裏で重なり
歩くのを止め眺めていた
そして 不意にも
この冬木立ちの影の長さ
自分の 命 の距離を憶っていた

吹き寄せる風は
ためらいを知らず
相変らず梢を揺らす
が、やがて
ああ、そうなんだと
木立ちを見上げ
微笑みかけていた

つい さっきまで
ポケットの中で
じっとしていた手が
生温かいまま今私から離れようとする
この息を包むかのように
口元で無意識に丸く合わさっていた

幾年月の思いを束ね
謳ってくれたあの日の道は
記憶の中へと旅立ち
木立ちを残したこの道は
これから
何を
語りかけてくれるのだろう

詩

【若山 紀子 先生選】

遠い親戚

小瀬木

知世

赤いあいつは甘ずっぱい

青いと言われるあいつも甘ずっぱい

色は誰がどう見ても正反対なのに

人に呼ばれる時は同じ名前で呼ばれる

見ためは違うが味はさほど変わらない

見ためは違うが名前はさほど変わらない

似ていそうで微妙に違う

赤りんご

青りんご

あの子らはきつと遠い親戚